

ヴァザーリの歴史観とラファエロ
——ピッコローミニ図書館壁画の素描の問題——

永井 裕子（日本女子大学）

ジョルジョ・ヴァザーリの『美術家列伝』によると、若き日のラファエロは中部イタリアで活躍した画家ピントリッキオに協力し、シエナ大聖堂ピッコローミニ図書館壁画の準備素描を制作した。現在ウフィツィ美術館素描版画室に残されている「バーゼル公会議に向かうエネア・シルヴィオ・ピッコローミニ」は、そのような素描の一つだとされている。本発表では、本素描と図書館壁画の関係を再考し、壁画連作にあたってのラファエロとピントリッキオの関係をヴァザーリがどのように捉えていたか、彼の芸術に対する歴史観の側面から解明することを目指す。

現在広く受け入れられているのは、本素描を図書館壁画の準備素描だとする説である。その理由としては、本素描にラファエロに特徴的な空間や人物配置が見られることがあげられる。しかし、ラファエロは《聖母の結婚》などでペルジーノの作品に基づきながら洗練された空間に作り変えているように、この特徴は作品制作の順を示すものとはならない。むしろ、本作品と壁画に見られるゴシック風宮廷行列が、マギの礼拝など伝統的な図像との関係を想起させる点が重要であろう。ラファエロの素描では、壁画に残された中世的特徴が排除された結果、騎馬人物のポーズが不自然になっている点などを検討する。

次に、ヴァザーリがラファエロの素描を所有し、自身の作品のモデルとしたことを示す。ヴァザーリは、ラファエロによる図書館壁画のための素描を所有していたと記述しており、本素描がその素描である可能性が考えられてきた。これを裏付けるものとして、ヴァザーリが制作したヴェッキオ宮殿の天井画を提示したい。天井画には、図書館壁画第一場面に使われた人物像が使われている。また、素描と天井画双方に見られる騎馬人物の不自然なポーズなど、細部を比較することによって、天井画の参照源となったのは壁画ではなく、ラファエロの素描であったことがわかる。これは、ヴァザーリがラファエロの素描を所有していたことを確証づけるものだろう。

ヴァザーリは、理想的芸術家としてのラファエロを称賛している一方で、ゴシック的伝統を受け継ぐピントリッキオを貶めていた。これは未成熟な15世紀を経て、16世紀に芸術は完成の域に達したという、ヴァザーリの芸術に対する歴史観に必要な方便であった。ヴァザーリは、ラファエロの作品を自身の作品に取り入れることで、自らを巨匠の系譜に連なる芸術家として高め、自身の歴史観を体現しなければならなかった。そのため、ピントリッキオの図書館壁画は、理想の芸術家ラファエロの構想によって生まれたとしたのである。このように、図書館壁画の素描に対するヴァザーリの姿勢からは、ヴァザーリの芸術に対する歴史観が、個々の作品の判断に影響を与えていることがわかる。